



TITLE:

ニホンザル野外観察施設(II.研究所 の概要)

AUTHOR(S):

渡邊, 邦夫; 室山, 泰之; 足澤, 貞成

CITATION:

渡邊, 邦夫 ...[et al]. ニホンザル野外観察施設(II.研究所の概要). 霊長類研究所年報 2002, 32: 55-58

ISSUE DATE:

2002-08-27

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/165809>

RIGHT:

類研究 17 : 136.

- 13) 室山泰之・杉浦秀樹・飯田景子・浅岡一雄 (2001) 桂皮酸アミドを用いたニホンザルにおける嫌悪条件付け. 第 55 回日本人類学会大会・第 17 回日本霊長類学会大会連合大会 (2001 年 7 月, 京都). 霊長類研究 17 (2) : 119.
- 14) 中村伸・岡本 好司・今村隆寿 (2001) 好中球の Tissue Factor (CD 142) : 血管内外での発現とその機序, 第 63 回日本血液学会 (4 月, 名古屋). Int. J. Hematol. 73(Suppl) : 230.
- 15) 中村伸 (2001) 花粉症・アレルギーの増大要因-サルの花粉症研究からの考察. 多摩アレルギー懇話会 (5 月, 三鷹).
- 16) 中村伸・平野真・岡田真紀・光永総子・清水慶子・Alice Bennett・Richard Eberle (2001) B ウイルスに対する DNA ワクチンの開発およびニホンザルモデル系での評価. 日本実験動物科学技術大会 (2001 年 5 月 横浜). 要旨集 p.175.
- 17) 中村伸・轟木秀一 (2001) 好中球の新たな役割 : Tissue Factor (CD142) の発現と凝固亢進. 第 8 回 Pharmaco-hematology シンポジウム (6 月, 東京). 要旨集 p.14.
- 18) 中村伸 (2002) 花粉症・アレルギー増大要因 : サル花粉症研究の視点からの検討. 御茶の水アレルギー研究会 (1 月 東京).
- 19) 中村伸 (2002) サル花粉症からヒト花粉症を考える : 花粉症・アレルギー増大要因の検討. 関東花粉症研究会 (1 月 東京).
- 20) 住谷文須紗・工藤なをみ・藤田志歩・浅岡一雄・川嶋洋一 (2001) 動物種及び性によるペルフルオロオクタン酸の尿排出の差. フォーラム 2001: 衛生薬学・環境トキシコロジー (2001 年 10 月, 金沢). 講演要旨集 P-137.
- 21) 住谷文須紗・工藤なをみ・藤田志歩・浅岡一雄・川嶋洋一 (2002) ペルフルオロオクタン酸の体内動態における種差および性差の検討. 日本薬学会第 122 年会 (2002 年 3 月, 千葉). 講演要旨集 p.178.
- 22) 竹味千恵・蔵本詩乃・比知屋寛之・山本重雄・片岡洋行・成松鎮雄・浅岡一雄・佐藤哲男 (2002) マーモセット肝による β 遮断薬ブフラロールの立体選択的代謝. 日本薬学会第 122 年会 (2002 年 3 月, 千葉). 講演要旨集 p.45.
- 23) 常松雅代・大久保公裕・後藤譲・中村伸 (2001) サルのスギ花粉症モデルにおけるヒト T 細胞多重エピトープの作用. 第 13 回日本アレルギー学会春季臨時大会. アレルギー 50 : 303.

- 24) 矢野一行・廣澤成美・坂本安・片山博雄・森口武史・Joung, K.E.・Sheen, Y.Y.・浅岡一雄 (2001) 日本と韓国とのフタル酸エステルによる環境汚染度の比較. フォーラム 2001: 衛生薬学・環境トキシコロジー (2001 年 10 月, 金沢). 講演要旨集 O3-1.

附属施設

ニホンザル野外観察施設

渡邊邦夫 (施設長併任)・室山泰之・足澤貞成¹⁾

近年野生ニホンザルの人里への接近と農作物被害の増加が全国各地から報告されるようになり, 日本固有種であるニホンザルの保護・管理に対する取り組みの必要性が指摘されている。このような情勢の中, 本施設では, ニホンザル個体群や生息環境の変化を把握することが保護・管理を考える上で不可欠であるとの認識に立ち, 基本的な生態学的資料を各地で継続的に収集する体制を整えることを長期的な目標として研究活動をおこなっている。また, 野生ニホンザルの保護・管理にかかわる研究にも積極的に取り組んでいる。

昨年度に引き続き, 各研究林でおこなわれている長期的な調査にスタッフができるだけ参加し, 各地での研究活動の現況の把握に努めた。具体的には, 屋久島西部林道地域でのニホンザル生息調査がおこなわれた。また, 保護・管理に直接かかわる活動としては, 被害管理のための基礎的調査および実験などがおこなわれた。

現在の施設運営は, 下北・屋久島・幸島の 3 研究林・観察ステーションに重点をおいておこなっている。上信越・木曽研究林での研究活動については, 保全生物学・野生動物管理学分野への取り組みとも相まって, 将来の新たな形での再編成を模索しているところである。

平成 13 年度の各地ステーションの状況は, 次の通りである。

1. 幸島観察所

幸島では昭和 28 年に餌付けが成功して以来, 全個体識別に基づいた群れの長期継続観察が行われている。平成 13 年には 7 頭の出産があったが, 内 2 頭が死亡している。平成 14 年 3 月末の時点での総個体数は, マキグループ約 10 頭を含め, 108 頭である。主群では 1 月に順位が 2 番目だったホタテがケムシと交代し, 第 1 位オスの座を獲得した。これまで幸島では 6 回の第 1 位オスの交代劇が確認されているが, 老齢による死亡ではなく個体間

の順位入れ替えという初めてのケースであった。これまででは全て第1位オスの老衰から死亡を経て、それに次ぐ順位をもったオスが引き継ぐという例ばかりである。なおケムシはその後第2位の地位に定着している。幸島に以前から存在した家系毎の個体数には、優劣によって大きな隔たりが生まれてきている。新たに第1位オスになったホタテは有位家系の出であるが、それも以前は全て劣位家系出身のオスによって第1位オスの座が占められていたのとは異なっている。半世紀以上を経てようやく家系毎の優劣がどのように繁殖成功度に影響しているのか、明らかになりつつある。なおマキグループの第1位オスはヨタカのままである。

今年度は生態機構分野の森によってメスザルの繁殖遅延の研究が行われた他、同大学院生の深谷によって採食選択の研究が行われた。串間市による幸島サル検討会では幸島内の整備や保全策についての検討が行われ、また幸島を正しく知ってもらうための活動として、宮崎県博物館における写真展の企画が進められている。

2. 下北研究林

下北半島に生息するニホンザル個体群の動向は、これまで複数の調査グループによって把握されてきた。具体的には下北野生生物研究所が下北半島北部の調査を、松岡を中心とした下北サル調査会が南西部のサルを、そして鈴木克哉（北大・文）等が北西部域のサル調査を継続して行っている。下北研究林は、半島内のサルの生息する地域全体を含むものとして設定されているが、調査が広範囲になるにつれ全体的な把握は容易ではなくなっている。

今年度もそれぞれの継続調査が行われたが、これまで中心になって調査を進めてきた足澤が病気がちだったため、施設としての調査活動が滞りがちであった。南西部の脇ノ沢村ではサルが住居に侵入する騒ぎがあり、また北西部の佐井村では農業被害が増えて社会問題になっている。下北半島のサルについては青森県による特定鳥獣保護管理計画が策定され、それに則った管理が行われているが、野辺地町周辺から逃げ出したタイワンザルらしき個体が半島内の群れに接触していたという情報もあり、種々の問題が表面化した年であった。

なお足澤は健康上の理由で3月末をもって退職することとなった。1973年6月以降29年間にわたる努力に感謝すると共に、今後も下北研究林の活動をいっそう活性化することでそれに報いたい。新たにどのような体制で研究活動を進めていくのか、現在協議が進められている。

3. 上信越研究林

上信越研究林では雑魚川流域から鳥甲山周辺の野外調査が行われたが、短期間であったため群れに出会うことはできなかった。近年は多数のハイカーが入山するようになり、この地域の変化は著しい。また横湯川下流域では農作物被害があちこちで頻発しており、上信越研究林全体としての調査計画を再編する必要に迫られている。また奥志賀高原にある上信越観察ステーション小屋は雪のために痛みが激しい。最近では車による乗り入れが簡単に行えるようになり、調査のために無理をして山中深くステーションを維持する必要もなくなっている。建物を廃棄して撤収する方向での検討が進められている。

4. 木曽研究林

木曽研究林も数回、訪れて調査が行われた。全体に以前と変わらず、猿害が激化した兆候は確認されなかった。群れや個体数の変動に関しての情報は少ないが、倉本周辺や須原地区では以前と同程度の集団が確認されている。

5. 屋久島研究林

屋久島研究林における研究活動は今年度も活発であった。上部域における採食生態学的研究（半谷：京都大・人類進化論）、ヤクシマザルの遺伝的変異を指標とした集団構造の研究（早石：京都大・人類進化論）、ヤクシマザルの発声行動（香田：京都大・人類進化論）などをテーマとした研究がおこなわれた。また夏期には、好広（龍谷大）らによる上部域での分布調査や杉浦（霊長研）などによる西部林道地域の個体群調査も継続されている。短期的に屋久島を訪れる研究者の数は多く、研究対象もサルやシカ、コウモリなどの哺乳類だけでなく、爬虫両棲類や植物など多岐にわたっており、今後も屋久島研究林とその周辺での研究活動は活発なことが予想される。このような研究活動を目的とした屋久島ステーションの利用は近年たいへん多くなっているが、現在のところ維持・運営は円滑に行なわれている。

また、研究成果を社会に還元する事を目的とした教育普及活動も、引き続き活発に行われている。全国から大学生を募集し、屋久島でフィールド・ワークの基礎を体験する「第3回屋久島フィールドワーク講座」が昨年度に引き続き開催され、多くの研究者が講師を勤めた（主催：上屋久町、共催：京都大学霊長類研究所、京都大学生態学研究センター）。若手研究者が中心となった屋久島研究自然教育グループによって、地元住民を対象とした「スライド講演会」が今年度も開催された。

<研究概要>

A) ニホンザルの社会生態学的、とくに自然群の環境利用と個体群の構造

渡邊邦夫・足澤貞成¹⁾

ニホンザルの群れの連続した分布をゆるす環境で、遊動する群れが示す生活と社会環境をとらえ、生存に必要な条件をあきらかにするため、下北半島西部の地域個体数について継続的な調査を行っている。

B) 野生ニホンザルの保護および全国のニホンザル個体群に関するデータベースの作成

渡邊邦夫・室山泰之

野生ニホンザル保護・管理のために、全国の野生ニホンザルに関するデータベースの作成、古分布の復元、ニホンザルに関する文献目録の作成などを行っている。現在までに四国、九州をのぞく地域の分布状況が明らかになっており、今後これらの地域の情報を収集する予定である。

C) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

渡邊邦夫・山口直嗣²⁾・冠地富士男²⁾

従来からの継続として、ポピュレーション動態に関する資料を収集し、各月毎にほぼ全個体の体重を測定している。また集団内でおこった出来事や通年の変化について分析を進めている。

D) スラウエシ・マカク種間雑種の研究

渡邊邦夫

インドネシア・スラウエシ中部においてスラウエシ・マカク2種、トンケアン・マカクとヘック・モンキーの間の種間雑種の研究を行なった。

E) 農地に依存するニホンザル集団の生態学的調査

室山泰之

農作物被害を引き起こしているニホンザルの複数集団を対象として、ラジオテレメトリー法を用いた基礎的な生態調査を三重県中部でおこなっている。

F) ニホンザルによる農作物被害に対する防除法の検討

室山泰之

特定の農作物に対する回避行動を形成する方法である嫌悪条件付けの実用化と、既存の防除法である電気柵や物理柵の効果測定および新しい防除技術の開発を目的として、研究所内で飼育されているニホンザルを対象に研究をおこなっている。

G) 被害管理モデルの検討

室山泰之

被害発生に関係する要因を組み込んだモデルを作成し、被害管理システムの構築と実践を試みている。

H) 下北半島に生息するニホンザル群の分裂と生息域の変動に関する研究

足澤貞成¹⁾・渡邊邦夫

下北半島に生息するニホンザル群は、次々と分裂しながら生息域を拡大し続けている。その経過を追跡すると共に、どのような形で安定していくのかについて継続的な観察を続けている。

I) 中国秦嶺山系における金絲猴の社会生態学的研究

李保国³⁾・渡邊邦夫

中国陝西省秦嶺山系において、金絲猴の社会生態学的調査を行った。

¹⁾教務補佐員 ²⁾文部科学技官 ³⁾COE 外国人研究員

<研究業績>

論文

—英文—

- 1) Yoshida, T., Matsumuro, M., Miyamoto, S., Muroyama, Y., Tashiro, Y., Takenosita, Y. & Sankai, T. (2001) Monitoring the reproduction status of Japanese monkeys (*Macaca fuscata*) by measurement of the steroid hormones in fecal samples. *Primates* 42: 367-373.

著書・総説

—英文—

- 1) Eudey, A. A., Hill, D. A. & Muroyama, Y. (2001) Are Japanese macaques threatened by neuroscience research? *Nature neuroscience* 4: 335.

報告・その他

—和文—

- 1) 井上雅央・室山泰之 (2001) ニホンザルによる農作物被害防止用資材の構造の検討. 京都大学霊長類研究所年報 31: 156.
- 2) 室山泰之 (2001) 山からサルが下りてきた—生態を知って防ぐ. サルの被害が増えた理由. 現代農業 (7月号) 80(8): 132-134.
- 3) 室山泰之 (2001) 山からサルが下りてきた—生態を知って防ぐ. 集落を「餌場」にしないための二つのポイント. 現代農業 (8月号) 80(9): 122-124.
- 4) 室山泰之 (2001) 山からサルが下りてきた—生態を

知って防ぐ。サルに突破されない田畑の囲い方。現代農業 (9月号) 80(10): 132-135.

- 5) 室山泰之 (2001) 山からサルが下りてきた一生態を知って防ぐ。心理作戦を成功させる方法。現代農業 (11月号) 80(12): 136-138.
- 6) 室山泰之 (2001) 山からサルが下りてきた一生態を知って防ぐ。サルを山に帰すには。現代農業 (12月号) 80(13): 130-131.
- 7) 室山泰之 (2001) 鳥獣害対策あれこれーサルー。全国農業新聞 2001年7月20日。
- 8) 渡邊邦夫 (2001) 幸島を訪れた人とその研究 (その6) 折々のこと。宮崎の自然 19: 112-122.
- 9) 渡邊邦夫 (編) (2002) スラウエシマカクの種間雑種個体の繁殖異常と狭い交雑帯の形成機構。平成12年度～13年度科学研究費補助金 (基盤研究(B)(2)) 研究成果報告書 pp. 60.

翻訳

一和文一

- 1) 渡邊邦夫他 (監修) (2001) 「野生動物の研究と管理技術」 (「Research and Management Techniques for Wildlife and Habitats」 鈴木正嗣編訳) 文永堂出版。

学会発表等

一英文一

- 1) Baoguo, Li., Zhang P., Watanabe K., Fukuda F. & Wada K. (2002) A stochastic dietary shift in the Sichuan snub-nosed monkeys. COE国際シンポジウム「Research on long-lived animals: The past, present and future of longitudinal field studies」 (2002年1月15-18日, 犬山). Abstracts p. 53.
- 2) Nakagawa, N., Ohsawa, H. & Muroyama, Y. (2002) Population and Social Dynamics of Patas Monkeys in Kala Maloue National Park, Northern Cameroon. COE国際シンポジウム「Research on long-lived animals: The past, present and future of longitudinal field studies」 (2002年1月15-18日, 犬山). Abstracts p. 20.
- 3) Ohsawa, H., Kawamoto, Y., Shirai, K., Maekawa, S., Nigi, H., Muroyama, Y., Torii, H., Uotani, M., Maruhashi, T., Araki, S. & other members of the Working Group of Wakayama Taiwan macaques (2002) Invasion of Taiwan macaques into Wakayama Prefecture, Japan and their hybridization with Japanese macaques. COE国際シンポジウム「Research on long-lived animals: The past, present and future of longitudinal field studies」 (2002年1月15-18日, 犬山). Abstracts p. 64.

一和文一

- 1) 浅岡一雄・飯田景子・鈴木樹理・渡邊邦夫・矢野一行 (2001) サルによる化学物質の影響評価の有用性。第4回環境ホルモン学会 (2001年12月, つくば).
- 2) 榎本知郎・渡邊邦夫 (2001) ヘックモンキー/トンケアンモンキー混血群の群れ内・群れ間の社会交渉。第55回日本人類学会大会・第17回日本霊長類学会大会連合大会 (2001年7月, 京都). 霊長類研究 17: 140.
- 3) 中野まゆみ・榎本知郎・後藤俊二・渡邊邦夫 (2001) ヘックモンキーの精巢の組織学的特徴ースラウエシマカクの種分化に関連して。第55回日本人類学会大会・第17回日本霊長類学会大会連合大会 (2001年7月, 京都). 霊長類研究 17: 165.
- 4) 室山泰之・杉浦秀樹・飯田景子・浅岡一雄 (2001) 桂皮酸を使ったニホンザルにおける嫌悪条件付け。第55回日本人類学会大会・第17回日本霊長類学会連合大会 (2001年7月, 京都). 霊長類研究 17: 119.
- 5) 室山泰之 (2001) 野生ニホンザルの実験利用ー保全と管理の立場から。第55回日本人類学会大会・第17回日本霊長類学会連合大会自由集会「霊長類の研究利用: 野生ニホンザルを中心に」 (2001年7月, 京都).
- 6) 室山泰之 (2001) ニホンザルの被害管理。第5回獣害対策学習会 (2001年12月, 芦屋).
- 7) 渡邊邦夫 (2001) 野生ニホンザルの現況。国立大学動物実験施設協議会サテライトミーティング (2001年5月, 宇都).
- 8) 渡邊邦夫・後藤俊二・榎本知郎 (2001) スラウエシマカク雑種個体群の研究。第55回日本人類学会大会・第17回日本霊長類学会大会連合大会 (2001年7月, 京都). 霊長類研究 17: 123.
- 9) 渡邊邦夫 (2001) 東南アジアにおける霊長類研究と国際協力。平成13年度東海・北陸・近畿地区国際企画担当職員研修に係わる講演 (2001年10月, 京都).

人類進化モデル研究センター

松林清明 (センター長併任)・景山節・平井啓久¹⁾
・上野吉一・後藤俊二・鈴木樹理・松林伸子²⁾
・三輪宣勝³⁾・熊崎清則³⁾・阿部政光³⁾・釜中慶朗³⁾
・前田典彦³⁾・加藤朗野³⁾

野生捕獲ニホンザルの実験利用をめぐる問題は今年の表面化し、幾つかの大学等に導入されたニホンザルの法的手続きの不備を取り上げた新聞記事や、動物権利団体の抗議活動があった。春には、隣接する財団法人日本モンキーセンターの飼育檻が破られて、サルが外に出される事件も発生した。

霊長類研究所は自家繁殖体制を整備していて、所外